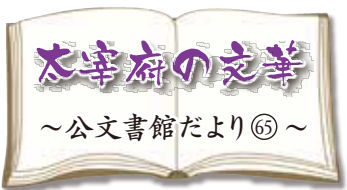


## 元号「平成」の最初の考案者

本年4月1日、新しい元号が「令和」に決まり、太宰府市にはわかに注目を浴びました。たくさんの人々が本市を訪れ、多くのマスコミをにぎわせました。ところで、一つ前の元号「平成」が決まった際も、これを太宰府ゆかりの元号とする新聞記事が掲載されたことをご存知でしょうか？

昭和天皇の崩御により、昭和64年1月7日、元号「平成」はその日のうちに定められ、翌8日から実施されました。しかし、「平成」は以前にも候補となったことがあり、2回目での採用だったのです。「明治」は11回目、「大正」は5回目で採用されましたので、こうしたことはこれまでもたびたび起こっていました。「平成」が初めて候補となったのは、「明治」の一つ前の年号「慶應」が決まった時のことでした。

元治2（1865）年4月7日、年号は「慶應」に改められます。年号の候補を勘申（かんしん）（大臣の仰せを受けて新年号にふさわしい文字を選び出し答申すること）する役割は、平安時代中期以降、大学寮の文章博士と式部省の大輔（長官）クラスが務めていました。この時は、文章博士高辻修長・式部大輔唐橋在光・式部権大輔清岡熙の3人がそれぞれ7号ずつ勘申



し、その中に「佳号」がないとして、さらに7号ずつ勘申し、都合42号の候補が考案されました。「平成」は2度目の勘申の際に提出され、そこから候補を7号に絞る際に外れています。

勘申者はいずれも菅原氏の一族です。文章博士と式部大輔は次第に学問を家業とする菅原氏の専門職となり、江戸時代までにはほぼ独占していました。「平成」を考案したのは高辻修長。修長は幕末明治期に太宰府天満宮の宮司（幕末期は別当）として活躍した西高辻信蔵の弟にあたります。

『西日本新聞』平成元年1月9日号夕刊に「菅原修長は西高辻家の祖先」などと題する7段抜きの記事が掲載されました。京都産業大学教授（当時）の所功氏の調べで、修長が実は太宰府天満宮宮司西高辻家ゆかりの人であることが分かったとされるものです。当時の宮司信良氏は記事に「光栄なこと」とコメントを寄せています。

「令和」の盛り上がりにかき消された感もありますが、前代の「平成」も太宰府ゆかりの元号として新聞に取り上げられたことを、ここに示しておきたいと思います。